タイトル：日銀の非伝統的金融政策と信用創造

所属：法政大学大学院 経済学研究科 経済学専攻 博士後期課程

氏名：市川雅浩

報告要旨

本研究の目的は、日銀がこれまで行ってきた非伝統的金融政策は、銀行の貸出行動にどのような影響を与えたのかを実証的に分析することである。具体的には、量的緩和からマイナス金利政策までの各政策の実施期間において、量（準備預金残高）と銀行貸出残高との関係を検証した。その結果、次の点が明らかになった。量的緩和政策は、銀行貸出に対し有意に正の効果がみられ、包括的な金融緩和政策も同様に正の効果がみられたものの、統計的に有意ではなかった。そして、量的・質的金融緩和は有意に負の効果が確認され、その後のマイナス金利政策は正の効果がみられたが、統計的に有意ではなかった。つまり、マネタリーベースを拡大する政策のマネーストック増加効果は、銀行が強い流動性制約に直面している場合は有意にみられるものの（量的緩和政策期）、それ以外は効果が乏しく、また、超過準備に付利したまま量を急増すると、貸出には有意に負の効果が生じることが示された（量的・質的金融緩和期）。日銀はすでに、現行の長短金利操作付き量的・質的金融緩和において、金融市場調節の主たる操作目標をマネタリーベースから金利に変更している。本研究の分析結果を踏まえると、この変更は合理的な判断と考えられる。